

日本における知の分割の展開

：就学前教育におけるリテラシーの伝達を手がかりに

石黒 万里子（東京成徳大学）

1. 課題設定

E.デュルケームによる、事物の聖／俗による二分割の議論から、近年の日本の「全国学力・学習状況調査」における、主として「知識」に関する問題／主として「活用」に関する問題の区分に至るまで、認識対象の分割とその基盤となる認識方法、すなわち知の分割は、さまざまな場面でみられる。その分割は恣意的なもの、「感情の所産」(デュルケーム)であるがゆえに、境界線は社会変動とともに繰り返し引き直され、新しい世界像の基盤となってきた。

デュルケームは中世の大学における三科（文法，論理学，修辞学）と四科（算術，天文学，幾何学，音楽）の分離について、「前者は人間の精神を志向し，後者は事物および世界を志向」しているという（Durkheim 訳書，1981）。B.バーンスティン（Bernstein 訳書，2000）はこれを踏まえ，その分離の背景として，それが当時のキリスト教的世界の確立の前提条件であったことを指摘する。そして現代においては，市場への適合性（マーケット・レリバンズ）が知のあり様を基礎づけているという。ローダー・ブラウンほか（Lauder, Brown et al. 訳書，2012）は，バーンスティンの指摘を踏まえ，現代の道具主義的な知識のあり方に注意を喚起している。

現在の日本で，こうした知の分割とその可変性が如実に現れているのが，就学前教育と小学校以上の教育段階との区分である。就学年齢の引き下げあるいは5歳児無償化といった教育改革の議論は，そこで伝達される知の

棲み分けの再編成をとまなう。本報告では，幼少期におけるリテラシーの伝達に焦点をあて，平成元年幼稚園教育要領改訂を手がかりに，日本における知の分割の展開について検討してみたい。

2. 日本におけるリテラシーの伝達

1989年の学習指導要領は，「新しい学力観」を掲げ，それにともなう指導要録の改訂では，「関心・意欲・態度」を「知識・理解」よりも重視するという知の再編成が行われた。この時改訂された幼稚園教育要領は，知識，技能の基盤となる「心情，意欲，態度」の育成を，幼稚園教育の基本的な「ねらい」と位置づけた。ねらいとは，到達目標ではなくあくまでも方向目標として定義され，現在に至っている。就学前教育と小学校以上とは，目標の質において明確に異なり，就学前は知に対する構えを育成する段階であり，知の中身については小学校以上の課題として再定位されたのである。

幼稚園教育要領は，文字学習について，子どもが文字に対して「興味・関心をもつ」ことをねらいとしており，その修得は小学校以上に位置づけられている。

こうした知の区分は，必ずしも国際的に見て共通であるとはいえない。例えばしばしば就学前教育の効果を示すものとして引用される，「効果的な就学前教育の実施プロジェクト」(Sure Start, 2004)は，就学準備をねらいとしてリテラシーの伝達に力を入れ，国際的にみれば「就学準備型」(OECD 訳書，2011)とされる英国における調査結果である。すなわ

ち、認識方法と認識対象とを分離した就学前後の知の編成は、日本に特徴的なものである。

しかし、実際のところ、私立幼稚園の半数以上（52.3%）は、通常の保育時間内に一斉活動としてひらがなを書く練習を行っている（ベネッセ教育総合研究所 2012）。日本の幼稚園の設置者は私立が 62.7%を占めており（平成 25 年度学校基本調査）、実質的には過半数の子どもが、就学前に文字を書くことを組織的系統的に伝達されている。このことから、公的指針における知の区分は、幼稚園内部におけるリテラシーの伝達の実質的な分化をもたらしているといえる。

3. 結語

日本の教育における「感情」の重視は、渡辺（2003）が示すように、小学校以降の教育段階においても特徴としても挙げられる。しかしそれがより際立って強調されているのが就学前教育であり、「心情主義」（汐見 2008）は、日本における知の分割の特徴的な一形態となっている。

その帰結として、日本における幼児期のリテラシーは、私有化された差異化のための文化資本となっている。

こうした知の分割のあり様は、保育所を含む就学前教育制度の再編が進行する中で、取り組まれるべき課題として残されている。

【主な参考文献】

ベネッセ教育総合研究所, 2012, 『第 2 回幼児教育・保育についての基本調査』。

Bernstein, Basil, 1996, *Pedagogy, Symbolic Control and Identity: Theory, Research and Critique*, Taylor and Francis. (= 2000, 久富善之ほか訳『＜教育＞の社会学理論—象徴統制, ＜教育＞の言説, アイデンティティ—』法政大学出版局)。

Durkheim, Émile, 1938, *L'Évolution pédagogique en France*, Felix Alcan, 2

vols., (=1981, 小関藤一郎訳『フランス教育思想史』行路社)。

Durkheim, Émile, Mauss, Marcel, 1903, 'De quelques formes primitives de classification' *L'année sociologique*, 1901-2. (=1980, 小関藤一郎訳『分類の未開形態』法政大学出版局)。

近藤幹生, 2010, 『明治 20・30 年代における就学年齢の根拠に関する研究：三島通良の諸論をめぐって』風間書房。

OECD, 2006, *Starting Strong II, Early Childhood Education and Care*, OECD Publishing (=2011, 星三和子ほか訳『OECD 保育白書—人生の始まりこそ力強く：乳幼児期の教育とケア(ECEC)の国際比較』明石書店)。

汐見稔幸, 2008, 「日本の幼児教育・保育改革のゆくえ——保育の質・専門性を問う知的教育」泉千勢・汐見稔幸・一見真理子編『世界の幼児教育・保育改革と学力』明石書店。

内田伸子, 1999, 『発達心理学：ことばの獲得と教育』岩波書店。

保田卓, 2013, 「カリキュラムと学力問題：教育改革との関連」石戸教嗣編『新版教育社会学を学ぶ人のために』世界思想社。

山田哲也, 2014, 「カリキュラムと学力」耳塚寛明編『教育格差の社会学』有斐閣。

渡辺雅子, 2003, 「歴史教育における説明スタイルと能力評価：日米小学校の授業比較」『教育社会学研究』第 73 集。